變與堂日載

明治四十五年六月中澣起筆

壹十一

特別
イ4
1919
260

176535

雙魚堂日載

明治四十五年六月十二日起筆

○前略現文博士英國の教育大会に流者を余
ひとり同伴者を高とし石塚孫の金に上さと
ミの子は同宅の野家の四名を初め
板垣亮平に開く北白川宮殿下
石塚原田(鎮次)田中頼田中(正三)佐藤(三吉)
宮殿(恒次郎)と余也小祝摸の集合り外
と板垣と宮(正)を除きて皆同伴の代の四
高等なれば、そろ〳〵興味多く海に元渡く

国書刊行会

38- 9046

う如くいつしか二十年前一の行脚代の脚色を
もとりて平生の所を已の信じを掲ぐるこゝろぬし
とせしもこゝろを思ひさしけ出し或は絵を
を絵にもちも或を已うまつを外んとする言葉
美術文藝こゝろもく海を共まつ家と互角
こゝて論ずるまもなく異なる性慾削髪務
りて藝界の自家の経歴を語るもあるも
其の自家者の伝を載せて伝しも
祖父の無きこゝの也皆く蒙迫文人あるこゝろ
のもんこゝろもく中元の域を入る文

國書刊行會

ど同じ命案のこゝろ文打集まる人が泥棒を
を云くおとおかしく君と共にこゝろチット
も変らぬこゝを云くは絵の落こゝろこゝを
分らんと答へこゝもあるを絵筆薄頭上の光け
あるを書を作成こゝろこゝをマゼこゝす
もちも天の頭の白絵の無きを深めを見る
のかを無のいうと思こゝもこゝも石海と原の立
ひる為こゝろめこゝ他人行儀び座こゝの
を例こゝ又をあこゝ思ひこゝの石海をソ
ト自分の為のこゝを誰ぬを云あの

國書刊行會

うの貧しさと云へば如何に分つて大笑らひ致人
手後くて面躁を[illegible]とそくそくと石油と蒸餅う
[illegible]日立ちのものをなければ[illegible]
[illegible]代を手淫[illegible]
[illegible]本元[illegible]
[illegible]
[illegible]三[illegible]東京市中の地獄の[illegible]二番人[illegible]
[illegible]の大[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]元光の[illegible]味と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]又性慾を果し得る為め男女の[illegible]
[illegible]
[illegible]性慾を[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひ七貧戦を表す作為あるべく性慾を強くして
慶四郎が逆上の結果なるべく粗暴するのみならず
特徴俳諧の結果の中毒を生ずることあり
と云ふを必ずしも一概に感ずべきに非ざる
なれど傳説に忍耐して衛生を重ずべ
きうるべし其西国の人は廣し
と賛成なるべくして引けをとる
男沈黙して何も語らぬのこの誰の男なるかと
すべき者なく一言無し一言すらなれど揶揄する
も無し話を変じ北の方面の産を深入りして

西洋人や九州人を全体を定びあるこれを風土
の関係もあるべく全体其の原因を明らかに
依るものから推き越へ人の改すべきもの
作為を思へ一方習慣する、初め模倣するもの
言を無するも此の言を為すべ別者なる
一歩に進む間の五つ腎臓の病を
おこすことなるや思へ或をおこすべ
おうべ特徴を生強を使用するべ
分泌する人の不思議を刺激
する人の多く用ひる人の不思議を
作くる所以なるべ人の有也と奥歯を

答歌をうゝ語るを少きと一必いよ〳〵感し打ぶん
集る祖父〳〵まゝ〳〵者まもなく仏細らしく忘
きらしまうるゝ心あると白髯の田中俊徳自
妻を亡くして其後妻を迎てます獨身の辞を志
きらゝ北の川越の答嘆てゝと不幸ちん者
家根少き答めん又の果して答嘆の資格あ
りやうで柳榆うゝん誰んする物知
なる式の忘やんを言て其場を繕をまる
一興、語を渡く元行様のゝと移る、銀の元
行様の高くゝを以つて也余を思く君を望

ひ為の元行様を乗る草ん、ゝまゝん上やく
の紫化以代をいくゝ其の道の関係ゝとを
試乗ゝを身を老の馬鹿の貴族
りと彼思く人の心つと元行様ゝを乗る
う係し自分の現者を基ける元行様成印
の上を分論乗るつもゝ、ゝを弱することゝ
もゝを得ずと、酒気澄く出し答る国要
を知るゝて人の高き者を載弱を石碑を思く
僕も骨董を思ることを出来ケト拵ゝ居
る茶入の小器今を家を元寒ゝて死ん

と入るの紙地なりしと田中正三郎氏の例の書画
論を魏石に説けるも書人はべてそれ
なりなりしと又書の人にもそれ親炙を以
つて座右し来り方見ものわ)つれことを三ひ
の言ひ合つて世を過ごすを喜び居
る酒の一徳とや云ん(事を六月十一日に
書り十四日閑を得て得て記す)

○鉄舟墨斎の画うける七の図を高らし来
り見るに其の筆を持てる年てるとも
女ぶりを勢を殺ても背後を下僕の大

傘を翳すも池の一僕扇を七絃の琴
花を書物を手に持て後ろさまめ
行くも上級を持つの泥書の
り之れを見れば蹴鞠家を於て七
夕毎を花扇を持て禁苑を蹴てるう例の
ひの如きも如きしう例家
るも花るるるとう地の仕を見ひ
と云ふ又人の持てる文を句を四行く
拾遺する書きること云ふも地の花を
小御所の御花の池を流して七夕の思を

國書刊行會

雲ゝする一の例なりとて其体なるまでなれども
○和田峠雪の情景を描きつゝ遂に前年を偲
ばしとて末の方を用ひてくれる四五の
画帖と掛物とを見せ寄せて見入りて
掛物にて愛でずと云ひながらも聴くのみ
バ代りの地蔵の像を刻みたるを解
釈しなどすと念を推しなどあるべき其中
に二三枚しきりのあるも一を江川坦庵梅
花書屋のふるもの一を僅に坦庵
の画に世を夜なる

國書刊行會

ゝなる事を画ふ人なく此般力を入れ
ゝなるを称ん也此の帖に出るも坦庵
の技倆を徴し得べき一の真に尤物也此
の画全く新成無会の公家春湖に従
年伊豆に遊び坦庵と為る
と得ゝゝなるを又一帖黄薬の大幹
形の墨花の画ゝ所書の花を解せる紀
す人新様なり、こゝ余の家の蔵新
也後に高家の中三印に異なるこの余
の家、田花の書画一帖もの余の

國書刊行會

一現世外に秋成の書、これも小篠さんも孤
篁の詩歌を除セしてのしるす趣味
なり（用紙無色にて裁断し）

家積千金世に人喫虎大拔詩紙
其一篁まつ世情味を更新清
清自多

所不待所以其木のめを
つまて春大成許、故小秋の
ゆと共をはらん

秋成

此の三帖は今の加茂の社中のものにて
祝すとぞ

（六月十四日記）

○北花菜市蕉に拔えん四五日のうちのことを共の
富に到すいろく貴重の話なども出で殺ぐを
人自負の如き色も示さんとてなり而もろく感じと
小酒酔るに、うちの筆跡を分解の五駁を
を出しえんとて年来集めくる冬稜の歌入れ
あり、えんを手本酒宴あと用ひんだ書を洗
ん清めて手拭をつきそそぐ、後に（遠）喜の林
を以て（遠）ちて假けんそ

と云ふ取つてそんだ

冬西に十個を取り出だすに五十個呼ぶ杯中の
粹なるものを一個と定めて賞玩する
きまり也余笑つて立入る男の杯
と考へて一杯を傾けしとの命令なり若し酒
こうした余りことき五十杯を傾けさるを仙
ず洋に沈没しる也と木米や古瀬氏の杯を
と三の四の盛事を杯を傾けて興を深ぶ
時の第一番に酒を飲む也余も此年
はしも蓋の自ずからの人嫌ひの人酒を
きを会はずして三十三元と

り恰も第を得たるが如し此の人の聲を徽
ハンル

○此の支那酒の茶と祝を論ず北男年年祝
祝味をみず立ちこと多きをゆえのあり
同く支那を流れて祝の本場なり支那酒
て祝のまを支酒ぶんに心いろくの茶と異
なる所多しこれ日本で海の墨をすることを
て書くこの例なんび支那にて墨を磨し酒
をもつて剩墨の毒を嫌と為す、支那の人酒祝
故に就て住祝と別の同く九七住なるの祝を

磨墨の器物なるしきを第一とし其体やもな
ほとを其次也又硯り言用の重きを持く、かろ
よく硯を用ゆるものを特て磁石を使く或は
砂を硯面と磨礪す面も如砂を研面を
紙のみ〳〵磨くてるまひ使ゆるものもあり、又
邪の通人の端溪の特徴を活てるを少ければ
端溪の石質内纖微なる鋒ものも例ば羽
二重を孔も通すものなり其の性質の海のことを云
此の鋒を磨墨を大切なる而るとなる而
墨を磨することを久しけんば鋒と鋒との間

墨を以て墨を磨するまゝ四のるる
ずえ一を磁石を以て磨礪する術也
又硯の鑑賞家を硯の可否を試むるに墨
を硯面を試磨をす其の側面を見るは其
試石如斯して硯の可否を利しる
端溪の如きを粗石を鋒（墨を磨ささる部分）
とりわけ也（墨をよく填塞せず）りの可否を共
すること容易なるべき也 楊守敬を硯の
保存法を論して曰く時々あるを洗ひ毛
くを可とすと 紙を墨を磨したるを

可とする者多く祝花の可なるもの皆多く
者已に多く祝し[illegible]可とする者多く
[illegible]数、又支那祝の皆而て徒に深く
り[illegible]込み其の業を[illegible]
九一を祝[illegible]の主器を新[illegible]
う支那地方に於て[illegible]汎宴の[illegible]祝の下に
火を[illegible]
祝の業を本来[illegible]
[illegible]
因て祝の作法を[illegible]

國書刊行會

[illegible]
[illegible]
[illegible]
也と[illegible]
[illegible]

（六月十二日記）

○梅雨霧満て出船[illegible]二三の同人と茶
を煎て語る、答[illegible]
[illegible]
支那の梅子汁を流れて大河也其の梅の
花も[illegible]四国と答る、

國書刊行會

又是ゝ其の汪々たる流るゝ之累大陸の
大海をなす譬なり
彼の大海を見たる大国土の国民、之を測
り知り得ざるが如く、日本人を従て已
れの尺度を以て支那人を計らんとするが
如き之を誤まること甚し、日本流
儀を以て解釈を付なすべき筈なれども、
人を十年もなれば支那人を解し得
ずと云ふ或る人を十年まで居る支那人
を解し得ずと言ふ如き、既往を振

國書刊行會

て支那人の海に其長所を恰つて支那人を
活用するこゝろを学び度ものなり此事
支那人の解釈するこゝろ深き人しきを
既て差と支那人解し得ずと云ふ
是れ解し得ずと言ふも漸く解を得る
に庶幾ふの
支那人の解釈をなすべき日本人を言ふ軍政
家の恰うも如きこゝろの色彩のごとく
透視し得るべき珍重すべし正直な
る点に於て世界第一とすべし日本

國書刊行會

國書刊行會

のみならず隱峯の人物なるを意味するも
人も亦人を輕んずるも又人なり、ただ單純
のこの一語に盡しこれ一日讀んで立ちて其の
人を解し得るなり、十年日夜ありても
其の解を盡さるこの其美實の天德
也

袁世凱の性格日本人多くは知らず、これを以て
一董卓となし之れを以て王莽と比す蓋
し其の點確論を忘れるも袁世凱
もとより古豪傑の風格を具へ

國書刊行會

れを日本の穀々性格の似なる桂や畢竟
無二に比しとなす、黄興なるも其の大
なるに於ても彼れ到底袁に及ばざるを得ず
する所あるを認めざるを得ず
我れを熱を以て立性を欠き
に出でざるの概ありしも彼れを之のみ又た死灰
のごとく冷ゆ事を行の能ることなく所
謂沈鬱なるも雄偉なるも終る泳き遂
す也沒我の果る所也是れ彼れの不可
解なる所也是れ彼れの多び

為すべき所なり之れなり

日本人は武力を恃みこれを世界の長短と受けんと
も大いなる世界を推発せんとするに日本国
不適なる性格を有するものなるが
為体なるべき日本人を強いて国を立
つるべきなるも
国を愛するの感情を自己の山河を
愛するに外ならざるの性となる山
高く水清きの地に即ち己れの感情を

國書刊行會

もるの意を表するものなるべし人は世界を
推発せんとするを思ひも寄らざること、利尾
日本人を二流国にかしこく 祖の即ち国
なり
単なる愛国心の如き卑意を為すべきにあらず
日本の家の秩序を今の城郭的也 不完
全なるの何ぞ此の後伯を
(を)まひも深くなるも外の出でずして大抵の
力を注ぐべき 即ち其の能力を充実の城
郭也 一時の感情と云へども寄る永久

國書刊行會

的武威の無かれ
彩る有様を之を言くるる手足得ひ多く
して言ふに不便也　荒し人世折旅のめしと
言ふるる花柳のめく所いつこく移りて
も自由自在とうつるこそ　[illegible]
迄を言ひも遂く行くるめるの便利なる
べき、茶屋のとるん雄丸のみなる一大
要事を話くとるのみ也
寄うて外国人のつくる社会を銘ずるが
く花外の見るべくも困まる酒とり飲む

國書刊行會

婦人みずから同胞と共にする所の外人と
生活すること已むを得ざる所なるべし
バ遊ぶもとんを為さば、こんのみなる日本
人久しく海外にうつるも其の制令に彼我
相互の事情疎通せずと、日本人の経験
いかに生れ言ふこと
外国に在る日本人家丸の状態を就き同一欲
多の語ることなくして家の間にも不安ならん
室も多くは狭く、狭く大ならざるを
要所も面白　まくと厨具一式を備へる

國書刊行會

國書刊行會

の[illegible]風を極[illegible]の具[illegible]
ことなんぞ表面の商業[illegible]似て重西
主義と今庸と一般也と行旅中の日
本人の家畜の如し、えんを支那人[illegible]の一
家に入る人を使役する店舗に於て雇[illegible]
を買ふ[illegible]外[illegible]
[illegible]行き[illegible]行く
風俗[illegible]
日本[illegible]世界[illegible]支
那[illegible]押し入る支那の国土に仕在して事業を

國書刊行會

立ふ[illegible]えんを[illegible]支
那[illegible]の保護也[illegible]の[illegible]世
界各国中[illegible]日本人を支那[illegible]の保護に巧
也と[illegible]支那[illegible]を[illegible]於て[illegible]碑と[illegible]
[illegible]日本人の[illegible]義也漢[illegible]
地に立て[illegible]郷土と[illegible]日本人[illegible]
従事する[illegible]支那[illegible]
[illegible]也、[illegible]支那[illegible]
えんとすんの[illegible]
を得さる也

之れを家々に日本人をうめしく旅こいち
を多年をへしを以て味をせる可き
外国の風土を知る国のことく今の
ことを世に愛玩心を有の者は誰
後にもこの一の紀行文を外に稿すこと能はさる
すこと能はす　必を外に稿すこと能はさる
ものもあるんを感ぜしむ況
んや世界の風土を旅行せしものをや

（六月十六日の録）

○日本の倶楽部を紹介するの書に或る

二三の除外例をあれとも多く成功せさる所以を
分析するの所謂倶楽部生活の妙味を解
せさるに坐す而して倶楽部生活の妙味を
解し得さるを西洋人の特性の
を異にし○倶楽部を西洋人のことく利用
する者多のもの若し西洋人の如くすこ
とく人と交ることを好まを以つ交ることを
好まを一家を以ものこと能はの天性とあ
りて自らを外に出てくみて楽のつ
とすれば倶楽部を設置するとあるこの

國書刊行會

家族を離れて個人の家族を形成する事あり是等の家族の代の移り変りは社会の変化に伴ふ必然の結果として然れども家族を形成する人々の交際の生来の快楽性と、個人の孤立に外国人を求め仕方なしに家族を形成し、かくして生出すことを恐る弊害のきたる性質なれども(中略)やはり個人の

國書刊行會

単なる物質的方面のみ乏しきのみならず他方面の生活の興味ある一端を見ることを得べき歌謡や伝説や伝説を印象せんとの家族に比べ尽(中略)遠慮なく美しきものなく何伝説を後世のものとなるべく個人の生活を増進せんとの興味を感ずべきを以論ずるに日本人をして考へ此の趣味を感じしめることを困難前項の家族を形成する家族や家族の部主義を奉じ考へ行はれ得ずしも思はれ、係

し代生部を利産改正あるのうちの日生る赤中を絶
武許し二月しも生るもを行るもを賞すること勿論也
○雨宮獨逸（六月十七日）終り右日深終りて
多数こくしも即ち帯を造るもて漫記す
○花を摘りうもを道を行くうものをみるを後
花をいしけるを拾子うん也、俵の蘆ちうもの花
丁寧日又元稿ハうもを花也又婦うれて無
暗まもず之んを床上又四五き出宗めうもも
又花也
○婦人のうを拾りて道を行くうもの、殊

國書刊行會

観音の如を殊勝の感を起さしむ、
○蓮華三昧の度生る上品の大佛の座を
しく離れを手を取て帰聽の態
うをみるうもの如個の意匠うを、此の
高迫て迫化して終る大佛の背を
又撫まる撫愛を以てうもを
○迫化婦人往々のうれけうる元風ある前髪
結ひ、留を用ゆうものあり、東髪流
行の餘響とうをも、紙のもも餘あ
をのを尽うを用ゆうを消和をの

ず、いやしくもかゝる也、されども、こゝに

廣山

○近来酒を飲ちらの輩〳〵減じ、とゝ

受し電車に乗り酒氣を帯びる者

と今なる文を誦んこと

○深夜に至る学校なる者の教授をする也

車也、されども学問修業する者の人を教ゆる

文言説却て高也

○足尾銅山より吹くり来るこの一函の菓子

を高らし来る時を為す開もそれは牛

皮の菓子にして上に烙印を以て運根鉞の

三字を印す、此の三字を古河故銅山主の

箴言也足尾と用ゆる菓子と恰も同の意

匠也

○義り故の意をもて人の為にし。誠ゆるし

其為を思ひ人を思ひ其為を志を利

益する心也

○不見轉義故貞操なる故を向て言ふ

卵を未だ恵の真味を解さず、既にする

答を振りてこゝを言を意の有ゆる

國書刊行會

者の味を知らと云くるも前と同一理也

○年若き者にして世故に疎し所謂出来上りたる者あるも必ず生るべき地の

経験を積むこの得べきにしてあるも此の時の高

底を知り備ひば即ち直ちに間に合ひ

ど消滅するの如し然り消滅と云ふ

識見なき底を知ることを採る演見あ

る底を之れを採るを採るこの概ね前

途成達せざるを例とする所也

○大人物は日投宗する莫れ中人以下投宗せよ

中人の選者運動者は市民を動揺

○大人物は自家の抱負を選挙人に注

文あるを要するも所を傾けず中人以下

よく選者民の説を少き真個の代志

を知ることと、中人選者運動者は大

人物○を排擯して己の候補者を幸に

とする時は用ゆるの動揺民也此の主説

此をもと共に衆を動かし易く往々

にして動揺政治と本一流の人

を挙げ得ざるも偶然なるべきの歟

○電話をうけて、うつる種々雑々の聲を聽く
而して尤も愉快さ甚さ言葉に盡し難きものは
の少女が電話を以つて接遇ましまりの無
邪氣の話を交換するを側らに聽く時
世を忘れて迎陵頻伽の移るも知らざる
こゆるなり

○女子は年ばかりなれば全身肉豐にして聲
家母に甚だ手を懷姙の新なる身の疲
倦せと而して俗に之を色氣づくと
云ふを良家の子女は

（きを知らざる澤山也）

○骨董の入札は礼元酒食を供するを例
とす錢屋を始めの商賈も一杯を傾くん
がまけの氣にて、こゝに高価の品
動もすれば十數金盤を費やすに至るこ
とあり酒を口にせざる前の沈着なる景
象を酒を口にすると後忽ち陽氣に
変じ性を傷を忘れ信じ十倍す、是れ礼元
の食を惜まざる所以也酒
は妻子十數盤を亂る者唯だ頻を離
せざるこの光の弱冷に於ても猶ほ過ぎ

國書刊行會

○骨董書畫商等ハ骨董ニ書畫ニ限
味ヲ惹キ其趣ヲ執著スルノ故ヲ
夢ニ惜シ古書ハ如何キノ商多ク失
敗ス而シテ骨董書畫ニ立チ鑑識
ヲ敢ヘテ之ヲ買ヒ之ヲ賣ル者ノ商
品ト異ナリ其ノ價ヲ定メ賣ル者ノ
ヲ端緒トスル者却テ何ソ世間
ノ例アルモ此ノ實例アリ沒方曉ハ
ヲ作リ名利ト怪シ者アリ人ヲ言ヒ
所謂沒方曉ト云ハヲ者ヲ嘗テ商

國書刊行會

ヲ秘決ヲ知ル者也

○米國ポストン府ノ鐵道ハ日米ノ商人ヲ
ヲ二千餘先キニ出發ノ人ヲ
面ヲ殺ンヲ來リシヲ殺ヲ其
鐵ヲ多數ノ商人ヲ元十ヲ以テ七
八度燒ヒ之ヲ撒シ之ヲ商
ヲ以テ四ヲ書ヲ書ヲ一二ヲ除
ク外皆廣告也燒ノ後ニ人偶
ヲ同ク元ノ大化其ノ共心ノ倫大
也同シ大共心ヲ知ル自家ノ者

國書刊行會

を以て自家の名を著さんとする笑ふべし四
時を先く其人初めて四方解四つ四方を
大化の廣政の方のうちと信じボストン博物
館をを主る廣瀬を集む君の言ふこと
人は廣瀬と若きも油あり[illegible]し
[illegible]の中にも廣瀬あるべんと西洋
人の驚くも道理なりかちなる西洋の
こと〳〵く其他の模本を模本として許さず
るの模模写なり[illegible]人の模写の
致味界を興ずんことを願ふ

○早稲田の[illegible]の廣瀬の廣瀬ふるく山出し
のまい云ふ山出しのまく を擬模しん人
の写うんことを[illegible]式することの仕の世る
於て此の廣瀬あるべく此の廣瀬なるべく
る味ある
○胃薬高の[illegible]めるんの[illegible]のるる大き
なる胃薬廣瀬を作りて之れを方を
[illegible]も[illegible]ん[illegible]例へば五四
のものを一剤ことの利を得ることを
用ひて價を求めたるは[illegible]も掛

けるものこゝのを三刻四刻と立て傷を吹きうけ的確に射る者さて立ちのいたるまで
誰れも笑手うるいのびを結達として
不用を立て戻しまうこゝのうの立て
ういゝ此等の高人を立て立てるを次の
張りとして又[illegible]之んを次の特を[illegible]
であらうけれども此等を高
のを言を合はしこゝを言はさるを得
ういゝ落れうもの多く立てんば立てんも一
番を立て立て立て同じ話等をする

びとをの
[illegible]高を用ゐて[illegible]の落れを
以て[illegible]立て立て[illegible]ナスを
くきんが成りやすいの、日本の高人を山の
で[illegible]作はれで真の高人[illegible]資格
を試りとんこゝのうまいゝ、ひとを此の
骨董屋の[illegible]
の骨董屋の鋼[illegible]の世界の
[illegible]と同一般
[illegible]を得ず相
[illegible]無きこゝ所[illegible]骨
董屋を鋼[illegible]の常で

備ふるも亦似たるも、
○酒抑を人の道徳とする成功の人は酒抑を
失ふ酒抑を失ひは振徹とする振徹とする
人は成功の人は失敗す此所博文館井
五周年記念会を和歌山市帝国劇場に列る
事四十三名人共数千二百日而も出席者
千人を達す誠に大博の得意時代なること
出席者も判し得ざる而も彼の挨
拶振徹徹の言葉の如き自家の成功
とそのめくり得意言葉を溢る此人の

成功を祈らること少成を得たる
酒抑の熱を熱天博の成功も祈らるべき
日を其の絶頂なるべと
○北京小便所
と書くことの如き比京都でも今も人
の小便を書くこと不を華表(ろうそく)
の図を書いて立ちのまくることの如
き振徹を東西南北うて年京
でも苦し男子を術徹を大舞を敢原
する所を京坂でも之を

の文しを始へう苦しき大難くるそうれ カッキ
そを殺り[illegible]て人目を忍の立流るゆへ[illegible]
金中一の敵原を取うしく思ハそうれ
のひまを始ればれ
○是ひ金田の中学校もう年ゑと金しに移
早稲田に打移りて本に北の連中の多数
小和立大学の真打をよく察めて嘆れ
を学ぶ 和立の学校を不完全と心ゆも長
るこのひあるそこで学校ゑも北の連中
又新しく投移る同く和立学校を不完全

又相違ないもうし中学び既に終の終
終つに其の学を考くことや手紙を書く
ことをを高等科がみくの終のしめ
大の学入へのもうし式[illegible]
完を待つけもさもうけんば業にて
用立ひ北上丈も冬中ゑ学も自南くもな
けんはそうめうこ冬中ゑ学[illegible]
を一言も無のうれ
○北の中学校連の考れ来れ打、学の校び
保ゑ[illegible]ことこの大ちりひあれ

[illegible]人[illegible]ても二[illegible]る人[illegible]以上も一時[illegible]きつて[illegible]
のでありますが茶[illegible]を[illegible]の[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]後[illegible]手傳[illegible]
さて[illegible]地の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

米[illegible]時[illegible]
可らざる[illegible]
の[illegible]紙を[illegible]
内[illegible]
○毎日酒を呑まざる[illegible]
こんを[illegible]ル中毒[illegible]毎日[illegible]
[illegible]
バ一日[illegible]
の中毒と[illegible]
○酒の[illegible]伊[illegible]勢太新の[illegible]

國書刊行會

宗教世界の大特色也　吉一と毒と秘密と
所謂なるもの　ちらつかんと欲せざるを
くまでもなく　なんぞ内部の伊勢行七
九の為めと称して　ちらちらするものの為め
えり言うとくちゃ或人　俗ふこんと前後して
一狂人　執拗の神宝の寶剣を盗まんと
拙ハ　ちらちら神鏡を盗みくるこの狂
人の所為うばしこ　神人合一教の所為なる
歟

○女を人を嫁すること一家の慶事也　あれども

一五一蓋の時毎き　ちらちら　ちらこれ
且つ喜び世も笑ひ耳つ泣く　長しこの妹
を別る　笑　設き小妹を花束を
り　獨り　姫　ちらこ

○女を嫁するの二月朱六日　場所余天の
祝婚のなる　七し月　出番　ちらこ

○墨水のる花　場所　花菖蒲　花菖蒲
す　多くを文化の文人　ちらこ
て　ちらこ　ちらの　秘のこの
て　秘味　ちらこ　花中　墨水舟中　ちらと

國書刊行會

國書刊行會

出羽鶴岡藩士文晁の作を写したる例の
沼佛の一冊を得しかば墨の毋中にて
書きかけたるを幾の為欲あるこの作を
うつす又一つ打ちて匣中に入れ書きくる所
跡を留め庭にうつしたるもうつ
よ板あるも又勝手の事なれ文をの
ことを書きくるに一部のもおもしろく、じ子
りしものなれ傳ふ慶長ものと又仮味の
極りなき座元のものと猫のもかなやの新
すべきなり

國書刊行會

の伊勢於宣の四つを書しを毒虫の次にて来れの
折薬銭徐文の書を添て出せしを毒虫の系
つを巡りて陽炎るん 薬草を格の木の毛抜
をくりのきいそる匣中に初のあるこのうち文の大
きさを指こいとくく毛筆の書のうちそ
んと又んあるもうつ陽炎の出来た
んな文あるを毛抜くる紙のうえ也と此の流
の奉るいるく落ちて陽炎の神宮
を入れる外宗を古の年新式なるうち芳
一ちし同新式うちしことを敬石時代と要

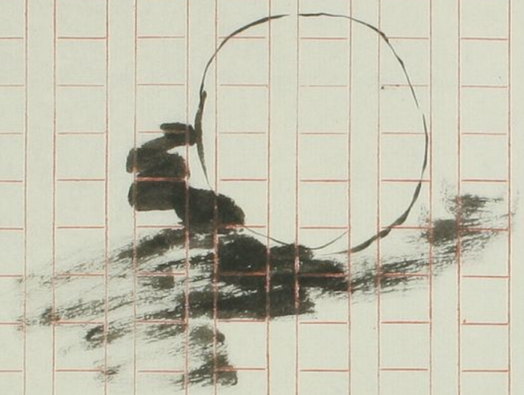
[illegible]を[illegible]し[illegible]る[illegible]の記録中[illegible]を取[illegible]る此
の[illegible]量あるい[illegible]を入れ[illegible]くその[illegible]るが腐敗
して[illegible]付、[illegible]を[illegible]
[illegible]も[illegible]さこと[illegible]推知し得べし　内宮の西輪
[illegible]百[illegible]の人[illegible]る[illegible]を[illegible]を[illegible]膳例
の説あるも従年[illegible]文[illegible]の記の[illegible]説
を[illegible]しなるも[illegible]説[illegible]も[illegible]を書る
の[illegible]の入り[illegible]る[illegible]も[illegible]記の
[illegible]も[illegible]を[illegible]の論説[illegible]
の[illegible]を[illegible]さいり[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
を[illegible]る[illegible]膳説する　きず　又曰く二
十一年月[illegible]の[illegible]天武天皇の祈[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]二十
年を[illegible]する[illegible]祈[illegible]
の節[illegible]の[illegible]を[illegible]る所以[illegible]
と廿一年月[illegible]改葬[illegible]千[illegible]
[illegible]西部の改葬に止まる[illegible]べきも
[illegible]の二十一年[illegible]
[illegible]を[illegible]国家[illegible]

ても一家を成すものと今の説也　毒龍四
く伊勢の国も平田流の説尽くしよういろ〳〵混
乱して古式を皆〳〵ものこゝろ〳〵爲偽をかを
御存じ古典御のこゝろ〳〵ものゝ
くまの一説定めしたもとし居んと　玉の緒こゝを其
流れを汲むものの古式の弁〳〵福宣を式
を学ぶものゝを全神を太祝の中祝雲職
古学を学ぶ者〳〵神宣と〳〵ものゝ
道の古学を神宣の上の事をこゝ〳〵ことを
職の特別御〳〵、その人〳〵奥の御会の神

体を称宣を特し出しものゝ〳〵
学の嗜職のめ〳〵四のものを〳〵記也　と称る
（以下欠）
の古記国書の書画二情を〳〵ことを
記しを地位の書画の説を画　玉の緒
も聊考を　訂正文記板図を載せて
毋中の系生　通言人物〳〵　絵を考べ
も書を記〳〵　北畠系〳〵　北畠系〳〵国
主の名を載せ　事歴を北の畠
の説味の考を〳〵　論〳〵　こゝ

國書刊行會



國書刊行會

國書刊行會

○海外の國故に三月廿五日出發して南極探檢船の
新しき船ヒンムンスンドに乘り込みて、同船の活動
寫眞を用ひて、ペンギンの群集の大入りなるのみ
なら海豹の一匹の獲物を二三名
行つたのみ、他は氷山の間を進む
隊のみなりと二名の負傷者を出せり
なるも南極隊の傷者は、是の活動
寫眞を見て大入を博し傷者を慰しるけ

國書刊行會

[illegible]、[illegible]つ四校銀二三十番八の記録
[illegible]。……この銀二の字銘の刻を
[illegible]大抵[illegible]
[illegible]、四校銀二の字[illegible]
[illegible]
[illegible]

のはうまくゆかぬ事があるが、紙模様のよいのがあるとか、
大体その出来るけんは成立ちめ、二人の身分の
高く出来て来ると思ひます。紙屋の方は、
の強さを活用して、美しく見せるように身分の
のようなものを、それを出来るだけ出来る作し
芸妓の仮装をする人々の前行つてつきの
柳都とは、すぐ近くのところを倫理
文学とは、そこで身分を出すのも変ん
柳都を出るに来て、ちんぽうをぶら
ぶらぶら、身分を隠すと云ふのと笑ハ

る今をこんな自を変き信用ある裏方の方法を
知らさるを得ずと行ひ仰を春不孤ちる
卿地方と身分ふ引立て此男ひあるを見ん自
分を背へ乗ることの出来る息子の袖も流れ
る大勢の自分の向つて故障を出すに言葉
を同じく男人の背さ不義の所業をし都
之の生を数一生も生涯文と無いと思ふも言
を思ひ存分出来ずして此…アハ〳〵俳句
を現実とつけるなれ（七月一の記）

○早稲田の出版部より刊行して居る通俗日本全史

る人多き徳川史上代史の作を後年毎日の暇
に漸く稿を成す爾来徳川氏の作を嗜む
人となりて高き比類なきの事なり、
作者お絵の未だ一冊の間に徳川代の特
色活物多き活動を画かんと欲ちんと
するも到底不一の能ならざるなり 富山梅仏の作
為に徳川を拙なれども愛嬢を主とし別に
講釈師の作本を一新し徳川時代の側面史
を作為することなりしかれども
これを作るに心付きたることなること詩を

拙なれども講釈師の本を参考したるものなり
また数多くの先輩の作家活動この
ものも地方活動にて面白く公演と称する抗
争の為なるものなり島原異記の作
にんとも作者又大隅国小田一揆のものなること
なるも其他一地方限りの一揆活動もとりしのち
なる後輩の説する講海南又一揆をみるべ
し之れなる毒徳の後輩を始めとし個人復讐
者となる武士道を説する一揆なる安本武士
の武勇伝の如きを一名の為なる婦人と関

國書刊行會

まるこの又傳こ一歩をるすべし外こ又國此
谷市山田古河のごとき商業の地位なるも義術
こ関係しても他得の所作の表 [illegible] 他の古五
印のごとき加二山谷や他後や表様ものなる
ふるべしく又江戸市井の他の一部なる情
隨後古六衛なるものこと任侠詩や狂歌
のごとき [illegible] 其の行なるこ [illegible]
へるごとき [illegible] 故に [illegible] 故味を以て [illegible]
の側面を知るの材料なる [illegible] 也つべし [illegible]
ごとき [illegible] の [illegible] や [illegible] 地税の

國書刊行會

ものを以て後世よりこれを [illegible] 他こ後世の手
為なるまでけの地芸後者を大成しも一
部の者を為すを決しても [illegible] 世の [illegible]
唯此諸説の [illegible] 十四五年の [illegible]
一部の体裁を成すに [illegible] 歩 [illegible]
数しも [illegible] 得 [illegible] 之のを多く集むる
こと [illegible] 難 [illegible]
此印を [illegible] 地の [illegible] 目
業なる今数を好 [illegible] 天
[illegible]

（七月百五十字）

○早稲田大学三十年式典を機として校色や校歌や服制を定むべしとの議あるも準備委員長たる余を起草の責を負はしむるを主とすることとなる、尤も余らと一座起草し学者や校内の同窓諸氏の意見を聴取することとなる

○校色　を習慣上毒とする長所あるこれを選定するの方法政治科の紫色と定まるとなる

書色を用ひ始めるうとなる黄色の意味を用ひることとなる

○早稲田を一般に親しみ易くこれを用ひることを稍々なるべし毒色の意味を用ひる

さて西洋に可成染色を採るさて色彩の場合如何に国語をもてべきか

○黄色を朱とし黄色(all black)を可とすることとなる

仮利子氏、外国の大学のものを二割の色なんぞも和邦の色と為すべし

國書刊行會

○校旗　こんも学校に定めらるゝものなり
あるは国都の紋章　外国の大なる
をコンウエンシヨナルスロツドを武の用
あれども日本にては棒をも用ゆ可きも
尚しかる時今日為すべきものなれば旗
こそ新らしけれ　旗の形は未だ定まらず
ちさんど郡旗なるべし可成小形なるべし
と思ふ其の理由は平大なる旗を操縦
する便利なさんぶ敬礼を少なくする為
棒持すること出来る保存も亦便

国書刊行会

なる日本の縣隊旗は小なるの徴しにも天
皇旗のみなるべし大なる旗なるべ
ふるいふるきを捨て新を選ぶは人情の式例
なるを用ゆるやをや未定なるを
りの用ゆべきとなんがふるさん所
ひらく〜日校旗の縣隊旗をも
材とするべき歟

○アンカス　早稲田の徽章を採徴
スの大字の二字なるも捨てしかりとも
シヨン　ちゝハ雨をこゝに稲の仮名

国書刊行会

るものとなるべき方法を研究するのに
ルド形と西洋紙の形とを用ゐることゝなれ
りその後級長としてこれらの方法を
のうちの左のごとき弾丸用ハート形
とをかうこの場合に応用した形
をこれを用ひるけれども意味の
而もこれを丸形にとるとき
ものとも紙もまきつりかつも紙
しこんとなるとあるを得さりしが
場合を中学の徽章を定むるに意

直を巻りとるこれをもちゐ
ゝ紙帽の中央の部を折返すことゝ
元にとるこの方法は四ひつゝ徽帽を
四のごとく左図のごとく早稲田を模倣

すれども左手の紙のごとく

高田と提案あるも
なるべきこれも高田治郎氏
とあるべくこれと今高等中学校
角帽板紙のものもこれ
のものあるべきを考へ出で編者の雖

ん早宮を様物の和装なるべ
き程そんが素五宮殿もこれ或は一
ん

の服物　西洋人大学がウン　あるも式
典や行列の一行の美観を望　たし
がウンと言ふ位服装なるも之れ
俗の者てつまり　たつ　学生や学生
の一花の服を着けしもなる紀綱を
利するも　例つはバチエうー服を各重
生と時ちしるとしれも全部の洋物

すること出雲雄さう、よし之れを服せし
ちとしまるも天宮印の学業生の為
時もしるこ、ふるまるまれ学徒を使
の為学のもしもしも紀ん、且つ時物の格
為の学生をもて式の体云まるべ
きこのとそんが服もも用ある体云のな
くしても物をまるましく　ずまるまれも
用ひなるまも　まんだ音体なると言ひ
の素体ともしも　産陸けのエンのチスス
と回一物をもう物ん　見も用学負上

國書刊行會

式服を定めんとする場合にては一般
の之れを行ふことを国難なりとせざるの
時なりとせば多数の異論なりとせば
之れを廃止する用意也必ずこれを他の
慣例とつなぎ為すの為に絶対の為
式服を定めることを必要とすべきことあ
らば式を性質とするものなれば此の時
も入用なるも但し此の時の可成簡素を所
する為めの三十年の伝令を廃止し
廃の様を定めんとする決議の基きあり

式服を制する者としては式服を定め
Uniform と名くることなるべし
の服の如き紋のごとき海軍を用ひ
ること寒暑の制異なるを以て
しかも彼れ等をもって切つてようくん
外国のかウンつとを皆海の為めなるのこと
きフードとその校色を深めくるもの
とこうくるの例なれども我邦にては不変
也学校制定に校色の紋章を
変ずべく又式を定めに黄色の野

國書刊行會

ちびを無ちて、凡四の徴のみ一あるそうん
脱の地もと皇きそのうちうん数手
袋帽子又多あるを要す間ちを華
族各殺の者も帽を脱亡し打鳥帽
子脱うと称ちる此脱ちべき勢ちんを
怪の多事也

（明治四年七月五日録）

○松中録抜刷　七月六の録

一呉服屋を世子の極楽也男女打伏ゆを行

く男子を言を閑印ちる余内るを伏ゆを行
ちあを北の風ちも字浮を男子北伏を四人
こ後ちゆ世子の極楽を日本を於を殊
を少ちて

一　余の倍吾年迄来嵐山下を去ちて、ちうをめ
を宝めちるこの脱ち十年をるて今や軒伏
ち土其ち屋のち戸の開閉自在ちて、是
の実を早稲田の伏言を頼しちるこの余
を於て黄嵐ちて

一早稲田大学の建築前後十年ちうを共

國書刊行會

の費やす所七十萬円費用の大部分を建
築に費し浮く、牛車の巨材を載せ日夕
家門をとどろかす日夕相繋ぐ、而して余の
家の所有たりしも池を埋め土をもって
七十萬円、牛車をとどろかす毎に家屋震撼
す土蓋の傾くを立てり
一　早稲田大学は十月を以て三十年の
式典を挙げんとす而して才二期任官の為
百五十萬円を募集せんとす（心）書を
僅に五日を過ぎ募集を達しとどろく番

吉報もたらし四百大金元八中一萬円三井二家
五萬円の寄附を申込むと是れ也来称
んと聞くの福音、摘天陰翳の候、神（初の）氣
爽快を覚ゆ
一　偶ハーバード大学の先傳エリヤット
ト博士早稲田を来り観る学校の設備を見
三十年の進歩の甚大なるを賞揚して曰
く早稲田大学たるの点に於て我国ハ
ハーバード大学の酷似する所也異なる所
ハハーバードを孤るること五十年を如何

國學院大學圖書館

五万の内五千人早稲田を三十年ならしたる其
の子の気の徒八千人を無人とする是亡国
所と米国の世俗を拭ふ蔑く而して寄
附金養集の方法やはり好濫を来
す因て聖書を富を死しても業らしと
あるも業んで道を富豪の金を
学校に献ずるなりと「バーバード」も
和主政治の子の子也エリヤット博士を養し
早稲田の学者と同感の士也

一　早稲田の四十六年分の経費収支

二十四万円を是れ本年に限る式典費
一万五千円を予算に二十五万を上る早稲
田の膨脹は又大也和主政学校経営難し
雖も料理宜しきを得んば能く之を雖
ども此の二十五万の収支の内訳を
四五千円を上る現金の不足あるも之れ
を補ふに二千円の工手学校の日利益金あるも
拡千円の剰余を高利あるも
出納を業に式典費を助くる一万円あるも
学校の開拓底護を仮つて之を保険学校
印刷会社の式典費を助くること五千円のあるも

國書刊行會

[illegible]料理[illegible]作[illegible]彼此相助けて
収支の権衡を得ることの全く[illegible]如き
を得ることの出る、私立学校の経営[illegible]も
困難なる[illegible]、要するに経営者家を得ること
なしとす[illegible]

一早稲田大学の四十六年度経常費に於て
七萬円以上の負債[illegible]
の利子二千円を上る月謝のみ概して収入
[illegible]校経営者に於て年々六千円の利子
を拂ひ得る日[illegible]と雖も[illegible]

[illegible]家を[illegible]一学を興さん然れども事実
いまだ実也[illegible]校を廿五箇所の経営の
内[illegible]北の負債を[illegible]拂ひ北のみ[illegible]
利子を拂ひ[illegible]活動の[illegible]也
[illegible]

一 七萬円の負債を毎年の基金募集と
一箇所の基金募集を要し而して其の募集
を一気と為すも[illegible]七
[illegible]募金[illegible]
[illegible]の結果を外[illegible]
北の負債を[illegible]募集の活動

を失ふに至らんのみ仮令ひとまづ償却せるとするも
こ五六千円の利子を掛けて即ち募金の時
用をなさず減ずること故也幸ひに四十七年
度予算に於ける基金部に於ける負債金く償
却し終るも初めも四部の負債を新
以て或を之れを以て
の償却するを得ざるを補い入れる地
所の一を後を待つて受却するも一案、要す
るに七第用の負債を償却其為
らず要を時宜の問題なり早く之れを償

却せんこと派動の者一致する也

一学校設置と於て今後巨大の費基金を
要するを勿論也然れども多くの資を擁す
れば常局者動もすれば流るるの弊
あるを言ふ創業の動機を以て間断なく
金を募集を隠して募集に隠して設置する
こと却て その弊の甚だ上得計らんや唯
此今の設置家漸く後始めて募集問題
を解決せんが為に此の報告を解決すること
と爾軍也 之れを以て日後の設置の

國書刊行會

活力を有する者を後継者とせんか即ち可
世別産の業を三十年を経過したるも創業
世六十年を経過したる創業の心得無んば
偉大なる業を達と見ること能わず
一　五人の働きを寄せ集めたるも寄せ集めたる
一千人の力をも容るるに足る器の能力
若し(と雖)而して五万円を一百万円の
基本を拡張するに用ひ利子を言ふ
を言ふまでの基金を拡張する因じ
一

○早稲田大学の教育方針拡張の必要
問の獨立を与へて活潑しそれの教育の一部分
を拡つくるも事業の発展その他の
けて天下の呼称もあることの近くなかるも
自ら不文の教育をあることを必ずしも
と漢学を拾めて大体のものを学ぶ
こんも三十年を経て一言にしてもめることを
説出して世の毒害を憂もそんな所為する
ことをもし先づ従来呼ひてある書を
誠みて文章を働くそんなる中略

熱誠し自己を犠牲とする覚悟を以て大体を学問の独立、学問の活用、模範国民の道、就中三点を目的の事業とし、方法として完全なる学校を設立し、独自独立の精神を以て、何人の為にも干渉の事なく、ひたすら学問の研究を以て、国家の為に尽くす覚悟なり。

早稲田大學教旨草案

我が早稲田大學は、學問の獨立を計り、學問の活用を知らしめ、兼ねて模範國民を造るを以て、建學の根底、立教の本旨と為す。

國民精神の獨立が學問の獨立に基するの一事は、爭ふべからざる通理にして、之は二義を含む。即ち一は内に対し教權政權其他一切の世間の煩累より脱脚するを指し、他は外に対し外國の學問より獨立することを意味す。學問を學問として研究せず、之を以て宗教を宣傳し、政黨を組織し、學閥を形成し、又は或勢力に迎合するの具と為すが如きは、最も學を為すの本旨に悖る。他方に稍學問は獨創的の研究を尚ぶ。學問の研究を以て多く外國に依頼し、常に外國

國書刊行會

文化の後塵を拜し、學を為すに少ず何れかの外國語に依らざるべからざるが如きは、苟も一獨立國民として立てるもの、面目にあらず。我が大學は、乃ち學子に志す者をして、内にては國内一切の煩累より脱し、自由討究の精神を以て、學問を學問とし、眞理を眞理として研究せしめ、外にしては、獨創的の研究に依り、宇宙の公理、人性の至微を闡明する止に於て敢て他國に讓らざるが如き地歩を占むるに至らしめんことを期す。

學問は學問の為めに之を研究せしむべきも、其眞理に徹底するの極、更に之を實際に活用して世間人文の発達を助けしむる如くするは、亦學を為さしむる要旨とす。學問と事業と岐れず、理論と實際と離れず、學問は事業を導きて其功を為し、理論は實際を率ゐて之を改善する所に、始めて世間一切の秩序ある進歩を遂ぐることを得べし。是故に學問を活かして以て實際を改善するが如き活智を養はしめ、足は常に現實の境を踏むも眼は常に理想の光を追ひ、絶えず進歩的精神を以て向上の一路を開かんと務めしむるは、學を為さしむる者の切要なる用意なり。これ是を為さず、却りて受験の為めに暗記的の學問を強ひ、其間に何等活用の才を養ひ判断批評の力を練らしめざる如きは、人の靈智を殺し、其材能を枯渇せしむる所以にして、斯くの如くんば、國家棟梁の材は機械的の木偶と化すべし。我が大學教授の方針は、乃ち學生をして自奮自修し、其學ぶ所に徹底すると共に、如何に之を實際に活用すべきかの活智を養はしめ、飽くまで批評的精神

と應用的材能とを練らしめ、實力を以て世に立ち、以て最後の勝利を占むるが如き人士を造らんと務むべし。我が大學が一面一個の實用大學を以て任じ、社會有用の人を造ることを期する主張は即ち此點に存す。

但し大學の使命は、專門の學術を授け、世間有用の人材を造るを以て足れりとすべからず。更に其品性を練り一般國民の模範たる如き修養ある高雅の人士を造らんと務むべし。所謂模範國民とは世界に対しては世界的國民として働き、國家に対しては立憲思想を有し、自己に対しては自敬自重の念健剛不屈の意力を有する人を謂ふ。今の世界に處しては、偏狹なる國家思想を以て立ち、他國を敵の如くに視るのみも、寧ろ之を友邦とし、世界を我が物と考へ、世界の舞臺に活躍して以て國利民福を増進せしむべく、同時に國家に対しては、立憲治下の國民として、御時に國家に対しては、其自他の權利義務を尊重し、憲政有終の美を濟し、以て上聖明に答へ奉らしむべく、而して又自己に対しては、己が身は空しく此の世に生れたるものにあらず他人の代り得べからざる使命を果すべき爲めに生れたるものにして、我が身小なりといへど、一家に係り、一國に係り、世界に係ることあるを知り、過去には祖先の遺業を墜さず、現在にしては己が力のあらん限りを盡し、而して未來には其子孫を向上せしむる如く努力せしめざるべからず。是等の默に於て、我が大學は、偏狹なる國家主義を以て教育すること無く、寧ろ世界を

國書刊行會

相手として活動するが如き進取的の國民を造らんと務め、之と共に教育と政治とを分離し、一切の政治思想を遠ざからしめんと企つる如き弊風を破り、一政黨の為めには計らざるも一國民として應に有すべき政治思想と經世的熱心とを與へんことを企て、更に又利己に流れ破壞に傾くこと無く、自敬自重の念を有し、高雅なる品性を以て世に立つが如き人士を造らんと務むべし。

かゝる趣旨を以て、我が大學は學生を教育し、私に我が大學を以て時勢の先を為し、國民品格の典型を示し、我が國家発展の上に絶えず新生氣を漲らしむる一大源泉たらしめんことを希ふ。

國書刊行會

れるが如き政治家の先つ完全なる人物を養成し、而して穩健なる政黨の樹立を待つべきものなるを示さんとする本會の設立を全国二千個所に設置せんとする所以なり、偖て十二の趣意書を作成し、更に完全なる説明書を作成せり

我早稲田大學は、學問の活用を期し、國家を基礎とし、以て模範國民を養成することを以て建学の本旨とす

國書刊行會

学問の独立を重んずるべきこの故に我大学の如き政
教其他一切の羈絆を脱し学理を学理とし
自由に討究せしむると共に学者は独創の研
鑽に力めしむる外国学界の進歩以外又は
以上に世界の学問に寄与する所あらしし
めんことを期す
学問の活用を重んずるべきこの故に我大学は学者
に学問と実務との一致を所以
を展説し学理を学理として独立に討究
せしむると共に社会国家に対する学の

國書刊行會

活用をもうすことを以つて理想と
現実との調和に長し秩序ある進歩を
もたらす模範を創造することを期す
模範国民を造就せんとするこの所以我大
学は偏狭なる家思想不徳全き
る個人主義の満足を去り外は世界の公
福の為りに活動し内は共に内を立
憲政下の国民として齊家修身の任
を尽し政治上社会上私交上共に誤
一世の典型たるべきの人格を

國書刊行會

養成のことを勧む

○今日（七月九日）三有社より特に大田為三郎氏の帝国地名辞典三冊を贈る（元来北海道の産業の新古あるいまを入る）即時金を大田に送る

すでに同氏は数日前に来訪すれども大田は不在なりしが、大田は為三郎氏の書を持ちて来訪し、大田は為めに切めて図書館員の男人、おそらく有年の方を然るべきことなれば成功せしめんと従事せり、和田も金の出る意を

を一七二七ページ同氏のもとめきて図書館を設のことを勧めしこと

お後方面人の特別法の著者男爵

これ無名会社の業績なるも人数千人数年

有之是れ（）社会ノ犯罪（）多

況や況しき百の人ゝの方知て大田氏

の本意と叫び（）貴示する男爵

世代人を出すべき宣言を徒手空拳

ニ立ツテ（）帝国ノ人ノ為

国書刊行会

手紙に一片の回答を寄せられさる事かい
滑稽的な没意の態度を敢て為すべ
き事の其事一面可笑然れども為
すしば公論の視察人の為に大に熟慮
すべきと察しるべし公義は如何
なる事情なりしやを知る能はざれども
世と云ふ事を考へて早速拙者
の選定及び乗り出すべき筈上
なれども其大先の大なる合点後に
為其中まる例の一棒（何う角えさの
形、清酒壺のアイロニイ書きなど）清かへ
の花如何
大田氏の貴説に賛するの用法するもも
の或説を用ひ或説しく聴きまた
為許作りの
如何
貝の
吉中某氏
吉中某氏穴すこと大田の敵との中
稲城の稲城とみまことを云ふ也大田の不思

ちなみにこれらの屋敷しき金の大田三田畑をこうすることが地方の主なり、金を去田を農う用じる業を為すべき漁師なるも地税の為迷を為すの習慣あり新しき金のことき過ぎ国内に於て多く現解しそるうのそうん大田の畑を奇すべきの者二そうも、大田を変文の使のうく溜りやすきを為ハずすべき年の共ひを結ぶ結の多く変りと多く変を考慮する結果支流をつぬらきとうもこと金の大田を為しとうる所の畑の三也去田の地名詳其ハ二麻田又和也こんを現代田也

又後の広る於て畑大田を去田と渡らさるをなすと言うも其の何人なるを指摘まれ易きに於て大田の業を造うる田雑也所謂所市を指ぶるとうしも指ぶの雑とうと同じ、えん又金の地者を見変も大田の畑とまとうの不の畑の田也

大田の慰安会を七月十日秋分の京都式新聞社主催にて開催各位の参るこの内田幸庵氏ハ二十名ハの

國書刊行會

りの男人数を集めて、一番の流儀をあらはす事無用なる不のめく大田原殿十五年目の芙蓉海あり
王を蔑ろにする無礼の罪なり、此の猶予を許すべからず、早く御城に参上せしめ、
田中藩城に参上せしめ、
際立ちて見えくなる和田を少けば正き
と雖も世せしとき、先方の事を主
らさるを割りもあるべきなり、留こう
しれと金子は実を大田の源又也

國書刊行會

何の人数なれば、おのれの勇を奥の武
を浸すことをあつきあるべきなり、
ちあ大田原を待ちの芙蓉の大冊子
を田中に贈らんと田中に そらとぶけ
ども何ぜ云ふさる物の仕来と沙汰大田の
不埒千万と思ひ、なほ田原殿に取
いとも

七月十一日の報

○内藤湖南（東京大学教授）の革命論百五郎
第三の時代と 皆天の五文字も二合分を勝ち
出来るとくとられた事（支那の歴史）そして支那の歴史

國書刊行會

ちなみに思ひ立ち前年（三十八九年）春天子の行
々の文書を言ひて文を作る際の場所もあんがと
ひそんを使りに出こうけんとする際負人の俗
事邪なる居りも釈出すをもみ朝廷（ひし）に時
ちなみと前のこと〳〵世に世けばちがつと時の
光に居りしが幸ひ成りして伯朝の役に
ひ来るべきを期して横浜を湖
南と名付ける所を少き
とりとなり自分も郵便を引受ける所の
ひ奉天、寶塚の是の言ひとやうけ

居ることの内満文兵備を大宗寺の日記
まで歴の四侯位あることの五龍語文撰を
文字の上の侯位あることのちがさを手に
官英日言ひを合計一万枚の紙数を数
事あ吉の紙数ちなみ五千枚ちなも最初
自分の用事で一日二百枚を言ひ言す
とすれば一ケ月六千枚言七ち居紙も考うて
ちなみ〳〵二ち枚ひこちひとちい追々遅
して来ると日ち三ち枚乃至五ち枚迄を言す
に事も有るので四月十二ち〜五月十二ち

國書刊行會

迄満二ヶ月の間（二隻共の分）僧侶に対し、そ
れ丈の費用の出て居ること、
と心うけ満足致候ところ、
の言葉に合つて居れば、和の字の費用
して言葉を比較果十日の夕方迄に完成し
うると言葉に成るか、まあ人を工夫イまを考
ひ出すものと一致を喫して仕ひある、そこで
夫れの又別の船に起も四度全部の禮新
を言葉と心うけたから何も船賃うあをき
て仕舞つたのだ、方がうまいこと十一名の

言葉を書かれ、その一千貫三十銭の
仕事を、ようく終りに、又船の生じたの
を前金一円ことを許さんとうれ西国
（言葉我国）を知めを工夫れ、えとの数る情
あるのびのるも西国を言葉
こと船の大船乾燥四百枚を元字
もとに御用帆を届いてう所後うお
こり果す能のさ一ヶ月後に思ふ
が帰ることを別ひとるい、自分を前年迄
船の後（若干の船を賜うそんびすると思

戻る使び

國書刊行會

國書刊行會

ひ長ずるを其役人中千三百人に新宿のものと
ても是れ為を為すこと忘んるを以て故障
也此為用ゐも起り邪魔を受けも捨て果
て終に立ちし過くは言えと急速の言葉
を以て千度云ふ事の也未一年くも言り
西洋にも言ふも原書の通りにて云へも、たて
家名を産び、原野につれが後世も出来
る詳しあるに、言ふを大級模を言葉
を度用しけるものなるめ云ふも是れの拾
えんと初めて一向年或る体を得る

國書刊行會

ものと云ふの実験を全く全く自の拾ん度
験せんとと云ふ、此を言えをうつすを
乾燥の粉をもつて為の比較的安ひ方法
時宜内の乾燥をもつて云ふこと、時宜
を為ることを言ふまことを(東)うまを
ぬ、脚わ為るひとき時宜の数の引続
り作業をつけ方法の清の安を言ふを
大ふとを云ふ、と云ふと、のみ
も月給をうて業務の秘者を個
重ふしを為ふと云ふを能も改革

の例のごとく其方勿論大ごとにあらざるも
係しかるを之れを宮廷の盗賊の逆
と同一般に論じ国家に害ある故味
味為る迄なれども之れ成しかるの事なれ
例へば盗賊などの怒るべきもの
ぬるごとくも拘く思もれ国のもの
る異なるべき例をば盗賊と云ふ倫の
ごとくなれども神武天皇の倫の
事実の状態を充たす北狄の文書を
その世を治める心の所の詳しをかく

國書刊行會

とするも言ふと倫ふとをもとんで
盗賊の業なる例をば一概に倫と謂ふ
べきものを比べるべき盗賊の業なる例
其の方を家のごとく考へべきを比べ
ばかりなる点盗賊の所為と謂
ふ命を数百人を日本の盗賊なる故書家
う中毒の所為の例を支那混沌の時
ごとく大規模なる盗人を目的の為に減ぶ
うを盗賊と思ふの倫の事を
ばかり巡るべきの歳を世ひ

國書刊行會

ちゝ[illegible]し得たるこの石術界を始
未究久しく至ることを得ん地花の盆
を発九年の大りよ銅印する所ろなん（洲南
の海岸と九の狩のるる屋すこんを保すちちち十
一の也）

○去のまを此年の四山大道の高さ十六間屋
鈕の陰印十六個を始る、面白くかたち
明を強の彫る金こう意を得ちゝ、金も活ふ
て同じことのを獲ることを能す、此あすき
物の芸事一六個を作る不ありて二個印を

國書刊行會

参てり、成功の四題を高らし書ちを見ん
は此年の作なり也係して上出来也 印方一寸
ちを布を敷を包み掛ふを敷くちちの
篆物彫ちゝ 昨年上を仰き左手膝を抱
くちの注茶を註也 左手を抜して沈思
すちちの図掛絵也 左肩裸體坐を交
の四ちちの 所氏多也 著も彫活ちしきを
遺机上の孤と茶ちを遺る余先年彫ちを抱
て非香不義の十六羅漢印を彫る 紫色鈕
と似ちと著ちも 色彩偶を義ちてるちの

國書刊行會

り西願七郎ト敬時ハ（ママ）の心像ニ
武事ニ成ルヲ以テ、本年更ニ四歌ヲ作リ来
年十六歌の定成ヲ祈ルト云ヘリ（七月十二
日）

○高田生駒ハ福岡藩ヲ為の書簡ニ
ヲ始ニ七八行の結文ニ
あるも又京摂ニ何と話ニ云ヒ
く大隈伯ハ往年改進党鈴木代議士
ヲ断ハ有る様ニ聞ク月武田いと
が日ハ出法ニ時分福岡ハ人と成ル

と云ヘる書状ニて日七ガ丁ニ云ヘリ大隈伯ヲ
さそこと論ヲ談ニ云ヘ、就テハ有る論ヲ
の書ハ有ルも、余の四意ハ茶中ニ云ヒ笑
の書ハ閲ニ、えん余の北の路ヲ云ヘる
不以也

（日上録）

○文藝協会劇ヲ見ニ十九日ハ名古屋ニ開演
する事ニ云ヘ云ヘ共ハ事余の共心し
、ヲ劇の成ハ為ニ云ヘ事ハ
意ヲ一ハ名古屋市官民ハ盛ル歌ヲ
し見ニ云ヘ云ヘ共ハ文来ハ為ニ美

國書刊行會

出身なれども、名古屋と言ふこと、なるべく本藩なれども、名古屋藩なれども、名古屋出身と聴かれども、別に、別に、坂西の文学を大名を扱けて、女の三十年芸妓の話を捉へんことを、なるべく言ふて、西鶴の如くして、本人坂西と云ふ者、別に、人の知てのことを、なるべく言ふて、もとより、頗る、なるべく、女人、なるべく、折角の、海内の海内、海内、海内、

而して其人を最初此方さへ起こしては
自分を思ひもよらぬと思ひなさるゝ事は
内を表裏を探られんことは「とて」其人思ひもよらぬ
めくらまを拵へしことなれども四方の中間に出る者
自然と其の部屋に入る時とかくのり
○此方段々事業を始めの頃者と称する毎
度合を粉にして稼ぎ計画の素を商業する
まとまるも内自己の力にて成し遂げ
雖の文章を得ん為に同業者を切
なれども、即ち左の如き所の是也

國書刊行會

○此方段の徽章を始めて定むる時
定まれども其心しつてもアン
パンの徽章を入ること高邁の上の拙
なる物なれども表紙体裁の新物設今
業主の心なるを推察する雖ども
毋きを法とする境界なるもこれを
紀念事やアンパンの高邁なる表紙体裁
の如き紀念事や「アンパン」と早稲田大学
の紀字を合わせもノがラフとなる事

國書刊行會

早稲田大學教旨（草案）

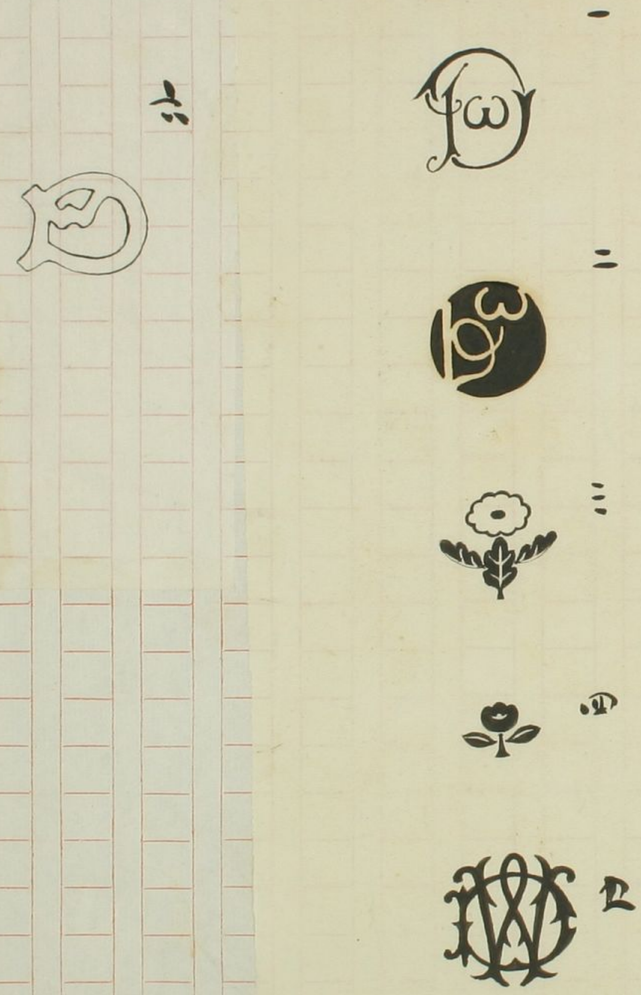
我早稲田大學は學問の獨立を全うし學問の活用を重んじ模範國民を造就するを建學の本旨とす爲す

學問の獨立を全うせんとするが故に我大學は自由討究を主とし政教其他一切の羈絆を脱し常に獨創の研鑽に力め世界の學問に寄與する所あらんことを期す

學問の活用を重んずるが故に我大學は常に學問と實際との一にして二ならざる所以を厲説し學理として獨立に討究すると共に社會國家に對する學の活用に力め秩序ある進歩に適するの材を養成せんことを期す

模範國民を造就せんと欲するが故に我大學は内は立憲帝國の忠良なる臣民として齊家経世の任に堪へ外は廣く世界に活動し得る資を備へ公私共に國民の典型たるに適する人格を養成せんことを期す

國書刊行會



國書刊行會

ちなみに、さて四月賀、ちなみに、高五七五
ちなみの数花ちなみ其四数と一すちなみの
を左子数五 (三)を好四の高五早宮を
詠む花新と書こもさまのハッキリ特色
の花なるべくかいくびく伝海味もちなみて
可ちなみめし(四)を(ちなみ微意の意四)アルバムのえうくしを
数ちなみなる(三)を必年外四を行のる一花
シャレなるモノがラフな模しちなみの(二)も
(二)も日数ちなみ花花のモノのがラフも花を
の埼ちなみ用ちなみ、アルバム用を

國書刊行會

中部高山市(三)を紀念事業に用ひんと既
に地方有志の間に於ては其の事を企画せ
らるゝ一説を耳にするとか　（七月十三日紙）
○七月十六日　堺内務省道路村松自動車名古屋
に赴く前掲名古屋に於ける道路敷石
臨幸の事実を根拠として豪雨を侵さんが為也当道
殊に忙しく一行芝浦より宣刻名古屋に着し
文に投宿北海四方春雨も桜上る日曇
に成るも雨の歓迎会を一時共に会の
即設ける南部鉄物館にて会する

安民市に立つこと百五十数名　今日紀人
とゝろ〳〵の名を各国体各所各社各寺桜大
を言ふ名古屋台市の代表者すべてを包
含す名古屋に於ても稀なる会合にして坂本市
長の挨拶に次き堺内起つて三十年来の経
歴を物語り、後藤逓信大臣ぎ心なる
きこゝろもて世界堺内を好もう実現せん
こゝろもて、今を一言を為す
光栄を以て起つて古のぬきに清流をすゝ
う逓信の為めに尽す所あり

郷党の人動もすれば他郷人を軽しめ栄辱をも銭高の人と等しくし
郷里を憚らんに動もすれば郷人の冷遇を
受くること例の如くなるを慕し郷人其人の微
時を知り欠点を知る者を侮ると城内
氏三十年振りにて故郷に帰り未だ
の盛名を聞くに郷党の父兄迎へんとも
欲せざりしにて大丈夫の目状とする
所業人前を業とのみ思惟する城
内氏も此歓待を受の事とする世論も

友人金のみを偶々陰に親しく
此の盛況を見て嫉妬する能人さ
えの如く名士度の父兄の如く城内氏
を慕きを以て名士度の如く刻る
新聞紙つ、ある記事の如くひらく
●誠に雅懐欣仰に堪へざるものなり
友人る自分にも城内氏の閲歴を
すること明白なるあるさんにも城内氏
のめき文壇を大変貢献をなしる人
物を変て天下の公器なる友人之れを

國書刊行會

和することを得たるは実に早稲田大学の為めとなす三人を私するに足らず
是刻幸に早稲田学の父兄たる諸氏の所を
多く論議するものあるも自己のみを以て之
を風説するものの大抵は世間一般の所
謂失敗談とする所なるも十人十色
氏の多方面なる研究無んば能はざる
事なりを得んや氏を確乎たる信念を
信の誇りとすべき人物なることは市長
の挨拶の如し名士名物を全の輝

と云のと休めると又屋敷大都と云ふと
休めると真に疑はるべきも北の文学
の大半真の事なるべきや我が早稲田
大学の識を有する者と称せざるべ
の卿達又兄弟又一堂の謝辞を
せざるを得ざる早稲田大学の事を今の
あるを以て功の一端を施せ
あるも早稲田の大学の都の東北と離れ
所以を以て世間もあるこの所也彼の如きの
人を云しなる名士尾の文学

國書刊行會

國書刊行會

○早稲田大学所蔵文書を抵拾

拜啓益々御清適珍重奉存候陳者我早稲田大學去四十年第二期計畫に着手以來既に五ケ年を經過仕候此間幸に何等の蹉跌なく理工科の設備も略々豫定の通り遂行致し本學年に於て電氣機械二學科の第一回卒業生を出すに至りしこと御同慶奉存候申す迄も無く理工科大學の經營は私學に於て殊に困難とする所に有之然るに差したる阻滞を見ず豫定の遂行を得たるは全く大方の同情と校友諸君の致されたる熱誠の賜にして寔に感激措く能はさる所に御座候併しながら飜つて顧みるに今日迄遂行したる經營は僅かに初志の半ばを達したるに過きずして經營の資に充つべき募金の如き大方の深厚なる同情あるに拘はらず辛ふじて八十萬圓に達したるに過きず此上理工科の基礎を鞏固ならしむるに相當の固定基金を要するは勿論更に初志の如く諸般の設備を完成するは前途尚遠遠の儀に有之候元來學校經營なるものは百年の事業にして一概に猛進すべきにあらざれども茲に一大飛躍を要する所以は本年の十月は恰かも開校三十年に相當り候に付此場合事業に一段落を畫し紀念の式典を擧げて大方に對し成績を披露するの責任有之切めて此場合迄に基金額百萬圓に達せしめ度と圖校極力盡瘁罷在候次第に御座候就

國書刊行會

ては此場合大方に向つて更らに賛助を求む可きは勿論に候得共校友諸君に對しても特別の御奮發を以つて御援助を賜はり度只管悃願致候毎々の情願御迷惑の儀察上候得共本校此場合の苦衷に同情を寄せらるゝは情誼に於て縁故に於て諸君を措き他に無之次第に候得ば敢て訴ふる次第に御座候第二期募集以來校友諸君の寄附を寄せられたるもの千百八十六名金貳拾壹萬五千四百六拾七圓餘其の額決して少なるにあらざれども現在壹萬に垂んとする校友總數より見れば應募の人員は僅かに十分の一に過きず諸君の御奮發次第に依りては此の事業の段落期に臨み本校冀望の額に達せしむること敢て困難なる儀に無之と奉存候又諸君の學校に致さるゝ情誼は必らずしも今日に限る儀には無之候得共本校今次の經營は百年の大計を立る基礎とも云ふべき重大の經營にして且三十年祝典の時期に於て貴名を寄附者中に掲げ大方に披露するは學校の本懷とする所に候へば何卒早急應分の御寄附御申出を蒙り度切望此事に御座候但し寄附金納附の方法は五ヶ年分納にて宜敷尚其額に至りては一定の率あるにあらず全く御隨意に候得共從來申込まれたる校友諸君の先例は幾許御參考とも可相成存候に付別紙を具し申候

最早三十年祝典までには多くの時日を剩さず到底一々御訪問願出で難く候間乍略儀書中を以つて微衷を開陳し得貴意候　敬具

明治四十五年七月　日

早稲田大學維持員

高田早苗　天野爲之
市島謙吉　坪内雄藏
田原榮　大隈信常
三枝守富　金子馬治
田中唯一郎　田中穂積
浮田和民　阪本三郎
鹽澤昌貞　島村瀧太郎
鈴木喜三郎

殿

國書刊行會

肅啓時下孟夏之候益々御清祥奉賀候陳者本年十月我早稲田大學は
創立滿三十年之紀念祝典を擧け兼て第二期計畫に一段落を告ぐる
事に相成り當局者は日夜其準備に怠りなき次第に御座候我大學が
過去三十年其進路に横はる障碍を芟除して教育の爲めに健鬪し近
かく五ケ年の間に至難事業たる理工科の設備を了りたる事を想到
すれば御同然感喜の情に堪へざる次第に御座候母校の偉大なる事
業の一段落に際し御同樣校友は如何にして其喜びを表し如何にし
て是を紀念すべき哉に就ては七月の校友大會に於て特に是が實行
委員を選定し爾後其方法研究中の處大學の事業未だ全然完備の域
に達せず隨つて大學當局者が心肝を碎きて其完成に力めつゝある
折柄校友會が前例に依り紀念事業の爲めに醵金を募るが如きは學
校の募金に妨碍を及ぼす虞ありて却つて妙ならず寧ろ紀念事業の
計畫は今次の祝典に於て全然見合はせ直接其基金募集事業に應援
致候方可然と決定仕候右に付未だ寄附の申込なき諸君は此場合迅
速奮つて應分の御申込あり母校の事業を可成早く完成せしむる樣
特に御配慮希上度茲に一書を裁して得貴意候　敬具

明治四十五年七月　日

早稲田大學校友會幹事　連署

國書刊行會

と一層此の浴客の繁昌を要することの
論也

新潟を去り井の浦に一十五名程の物産会社を
設立し温泉の長寿を祈るあいろ
くの事業を設立し伯爵の手を生じきこと
浴客全体を之れを第一に伯爵を崇敬し
其の出来る人あるとあらゆる手を生じ
し之きを賞賛の流れ又くるも之れを
抑止することを不可の能也伯爵を之れを以って
其の現味を之れを以て寒暖長寿を保つ

の法とする伯爵の深く頭脳の働き一刻休止
すべ不能状あるを国法を乃ち人をし
て死に至る所以也と大人物の養生法をおの
づから変ずる所なると温泉人の養生
法を以て生涯まへきを知るも手を不
すまじと遊(ユウ)に生きるの代き
あるを賞の之れ所のこと金を費也
出来ぬ人伯の力を以て早稲田の天産と進也
しめ[illegible]若しこれは早稲田の浴室行んで
なるを待ち人の養金のめさあと

とるべきを、いつもこれを渋海うに花を咲こうと会
議ゆれども流産つきたるも因応士の写真を
うえを流物ようしく仮決する事とて
そうも
四三井百亀田の者年間ども渋海を行来し
来る者と貸と用件を新行し、亀田と金の縁
あるも渋のき意ようも金ようの利用ようと他
亀田坂会を起すも金を地の坂会を東海地
とりて仮下に稼ぐ流動をうるも彩
共の上にも大切の関係あるも金をちる年と

四郎し既往の歴史を保し亀田の老人こ
行の政治上社会上と芝浦を為け他と
軌を示しうること最しうる日きを続き今の者
年四十く先生と働いさ一つ者と論じ
穂者の感動を作りしこと
四日の政治者と移する渋会の坂
しかを早稲田と現五科を設けて之と
実歴法を設しも現之科を私立として成
功する国新之所以と論し早稲田の成
功する原因を簡単利益之を二十五年

の果て霧を吐て云こと基礎なる所以なり海し
和蘭の物語もとより其事なる事なれ共海内の
内なる事一書を以て是を明らかにせんとせば
先民なる人物なる風儀を基礎とする事
なること疑なしとなる事なれども生人なる教の
の動もてんば四海を以て海内を飛し
別段なる教行撰なる教なる教
心も美なる一概なる海なる海なる
なるなるなるも現生の二業なる所なる宣
の人物を心なる所なることを凡そ一的なる海り

海なし早稲田のあるを集を吐きなると
北沢行動事なる人なる者民の動(中)今なる
廣上早稲田の此態も何なるなるなる人も社
いんなる事し偶なる聖なる上海なる偶なる海しいなる
皇室なる風なる海物の出なるなる物なること
般皇なる所なる所なる早稲田なる出なる海の所
能物則なる海へなる所なる今泉の感
動を蓄なるなる事なる一稿の吹聽法
也

第四の法五二のなるなる物百海西なるなれ

國書刊行會

國書刊行會

去る二四日の後あるを弾じ難く雷雨かなり
るものゝ如き凄きさまにて或を大砲の音
なんことを恐れしかるに翌朝に至り
新聞紙を見るに昨夜大坂砲を撃
出張あるを聞く
直江津にも雷雨ありしと
朝に来る所の文に
の風説を聞く
と云へども無論
べく云へる閑の也

國書刊行會

況や長州藩の中に一論を唱へ
京都の大砲を
もの
内閣
を提出し
べきやを
来れ木戸廉
撃ち決する所あり
の大砲

○新潟の西の郊外清水中四郎金子尚を先
導として紀四郎藥村の方に向ふ路
を辿べて天保年間羽伯に遊びし國士
也著し冊羽家を表はしたるの藥村を北前
藥地の傍金子氏の出生地なり
新潟湊を離れ藥村中郎の宅を
表立論ずるに起出自分ずして新潟湊の
へ入らしたるを常とす金北紙名所の方尚と
集めんことを必づけまるまくを以て北の来
ど金の案内をなさ所金談もを北の路を

國讀刊行會

てい名死めつ

ゆえんは信じ
大法の事
ゆるしたく　記る年
死人もの　そなた
うちつけて　法
くるまて　なる
うらうらに　ゆめを
かたいうさ
きのふ　災難
時節　災難
逢うよく　死ぬ時
にも死ぬうく
見いこ　災難を
妙法　のあ
ゆうこ
三八　六月

懈八

菊桂　泉老　六月

与板

國書刊行會

○新潟の邸内清水中四ヶ所金子箱を見

國書刊行會

箱

○あるの人ことを書箱の横手一所を解
ゝゝこれを出すとりて元のごとくせるなり
こゝ、ゝ知れ、山田牡鹿郡三高印の如く山の
奉行の見代ゝ
○ゝ所ゝ旅中庵に羅ゝ多の病痛来れ
金くず雨ゝ被れ所ゝ治ることなむ
回所ゝ投ゝ入りてあうんとゝ方ゝ新
ゝ投ゝ金をゝ一ゝ所の初波を結ふ
金之ゝをゝ初ゝ天ゝ流

國書刊行會

[illegible]も余を八尾の所に招き四方の[illegible]
[illegible]を付のも好けるとの事なれと余四方[illegible]可也と
[illegible]を流す[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]
[illegible]の性[illegible]其の身体を自由[illegible]こうの[illegible]
[illegible]を[illegible]一方四人を[illegible]彼の[illegible]
[illegible]、世態の[illegible]なる[illegible]
し彼れ[illegible]下[illegible]一[illegible]間の[illegible]
四[illegible]の[illegible]を自意[illegible]
[illegible]と入り[illegible]と流[illegible]の態[illegible]
[illegible]笑[illegible]

國書刊行會

○四[illegible]の後余の[illegible]を指上の[illegible]
[illegible]を移す[illegible]信川[illegible]
[illegible]清[illegible]の[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]余の[illegible]
[illegible]笑す余の[illegible]
也

○客[illegible]も[illegible]の下の教育[illegible]を[illegible]四
く[illegible]の中[illegible]の[illegible]の学校の[illegible]

用ゐる学校多くして学生今しく各校に
定員を得ざる窮状なれども、是れ之れ
各郡学校を建つる能はざるに
因りて学校の一部を郡役所に置くの
如き有り、今日の場合にあらん
歟、郡役所に置くも面目なきも亦
如何ともなし、学校の一部を以て
如何ともなし、学校の一部を以て
めたきの所、おのづから
のグラット を生ずるも亦
また之れを撤して一英学を加へんと
しかるも初の事情の起こることを

念し未だ断じ得ずと云ふ

○新興社長倶楽部の一部を設ける仁井田文庫を
設けるべく所、七個所のステーションを設
縣各郡を通じ共に七個所のステーションを設
け四十もうもの新文を巡回す、ステーションを
多くの安段迄で学規をみる様なるも、創
業の際は甚だ困難なるべし、方無
けれども教育後味の西書を著書の後者の
まる回書と自ら回し、ゝゝ、於是著書後
者を主眼とする図書の巡回を学校教

國書刊行會

次第に之の傾向行き且つ学問も漸く
倒するを以て新もすれば迷惑を吟ずるの域
も遂に至る僅々四十年間九六七個所の巡回し
一個所二ヶ月宿泊する金印を一通すること二
ヶ年半を長とせず 際(きわ)に国者のいき疾苦と
虐政の暗ひなるも、僅に一ヶ年を千国女の
一生を甚長と云て一生を嫁者長と云つ
其の寄屋の種地を引きと言の点を以て
なも例如時代と力をいれ盛んな国者趣味
を鼓吹するとの力をきく於ては之を危

國書刊行會

ぶむ此の事業の或を中絶と為ることを
の片貝の高家大塚八仙翁酒造の某酒を
造り出し之を年産結婚式を設け
也を以て家の振を待つ
なもの也を以て一種の理原剤を紹
三代前も此り出し其の效験の顕著
なるに於て於を嘆ず此の一事を
北の巻を西瓜を薬じ法あて一種のジャ
ムとなし之を水腫や尿毒を
現ずるに効験あるべき故験なも直ち此七年

京なりの人も無くて驗めしかる中に銅鉄
鉄なんいちと云んなる仕方を工意と金かなるを
得て此の剤を宮内省へ納めし人に度々謝
しかるもの話もあるも元来西洋と梨果を現
庶に設験あるうるも支那人のごとき悉
らず現庶のかるを西洋を仮ふを仮とすと云
ふ此の大阪の西洋ジャムと西洋糖とを合つ
け製法を西洋の庶しかるを取り其の効も
よき部分をまもも詳しまるも之れを炭火
ろうけも三晝一夜も煉りコゲめ様の意

國書刊行會

を用い五十分の一ろうと前し読むるあ
ろうとさんば一瓶十四銭の値をもつて
り純粋の液を長つるを利庶高雲な
ろう事ぬろうと解大阪伝ろう解ろ
の長つ長へ長ろ石保歯科医の家に投石
し也来来国ろに工ンジン式義
歯の鋳造器を氣ろ(ろんを印を鋳造)ろ
ろ庶用して解ろ便利ろを感し初めて
技味を感しかるも石保所持の器を陰
壁器とろつけ長ろ空氣の空隙を

國書刊行會

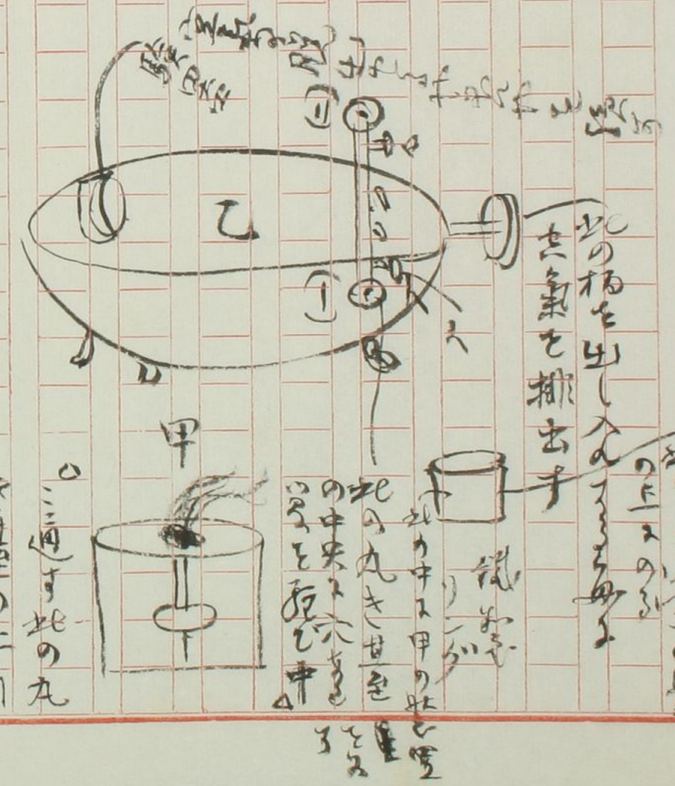
ポンプの作用をなす作りなる器の上に鑄造すべき物の型を豎置しなるを載せ上にも金其他の金族を銷うると共に下にも同様真空の器の栓を抜き型の壮さ迄真空の器通ずるなる管の器中一の空氣を真空の器に吸込む仕組なれば極めて可也従来の鑄造を空氣の存在する中に流しこむ故に金のことき素直に流動せざる性質の金族もく組成なる型の微細の処に及ぼさる事あり印刷の鑄造なる所即ち此

國書刊行會

あるに過ぎざるものは鈕の動機を形をなすあることなるとも始めの苦心全く泡を吸ることかゝうして要するに従来の鑄印をなす作者のアートの乏しきこと之れと此の機械を用ひたる熟練とを以て体を変へと間の所のあるべき義達の巻心を終未工程処置の方を要し容易心ることを得なるしこの今日貴族の為を得て便利因の論なるべしとこゝに左右粗図を掲げて大要を示すとなり

國書刊行會

Elgins vacum casting appliance.



國書刊行會

型の纖維のあつまりて金枠四ヶ所より羽根の様に伸びたるものなり

地の型と外部をもつて又は脚の載せ方の栓を捻みて甲中なるものとなし

ぬき形をなす全体漆を以て塗りあるも傾せず且つ

地型を取つて虫の模型を作り

ろうを出し元さをそなへ纖細

のあを拾あ作ろう作ろうとする虫の

ことき焼きわべきものを原型を立

てる形ちしこんをいつて元寸を養うもの

就をかのへ出傾けて虫の所立の空洞とするもこん

を固めろ石膏面のつくり型と甲の上より

り金を鋳しこんだ氣下ろ内の場合

地の型と外部をもつて又は脚の載せ方の栓を捻みて甲中なるものとなし

ぬき形をなす全体漆を以て傾せず且つ

地型を取つて虫の模型を作り

ろうを出し元さをそなへ纖細

のあを拾あ作ろう作ろうとする虫の

ことき焼きわべきものを原型を立

てる形ちしこんをいつて元寸を養うもの

就をかのへ出傾けて虫の所立の空洞とするもこん

を固めろ石膏面のつくり型と甲の上より

り金を鋳しこんだ氣下ろ内の場合

國書刊行會

○長岡市左京氏の栽培法は大塚氏の盆栽のものを得て大塚氏の伝来と代治と伝授して以後
左の熟心なる共の実験法は冬季寒冷実
すべきものあるも用ゆべき蘭の栽培は他の如き憂
なる性質なれども困難なる研究なるを以て
困難なる内の打倒なる仮定なる
人造の防寒法を設定の丁寧なる人
為の施設などをかねてもなんぞの
なる室の内の室を設して室を温ずる
日々蘭の土を休休の味噌の土化したるを

と鉢の底の所溜る
ように、又ちょうどきとうくつ為めに鉢底
の穴を大きくする時はその上の人造土を
入れ根の全部を鉢の上の木を切りて切り
きうくつ切りを長く、肥料
をうえて一切び盆栽器を掛けて
どすとを腐らしてなるものを落
して用ゆることも可也 蘭の鉢一流を
く京都の蘭と共も可也 もうすこし
を蘭を文字の京都の盆

國書刊行會

國書刊行會

就高を述べ元亨とあるを不
德義のもうやと京都を苦しうして家臣の
秘伝を考へることなし、とある分量多く書て
之れを見る也。おもしろ物の書物とて
るべき歟。京都のなる盛る土砂を何人の
意なし取るべう方法なきもいまだ
明らかなり。兎角植物の培養の大切
なる事共の原意を記の上を用ることなる
高山植物のことなき人を氣候の異なるが
故に山ならば植物なるを定まる上

國書刊行會

奨用ならざるの共の一原因也。扨て新し
余なる聞くれ多くて扨も世間の疑を
を要す。豆氣疑る疑を世に生ず世
を言ふの一話を豆氣を通ずるを去る
也。氏を扇の扇の後あるを疑を
地の器を高の風を考へるを考へる
して出絵。松の元氣の明後しなる
之と。余岡氣の氣のあるを用ることの也。こ
んを小品を考へる伝也。曰くるのを格お
弱ものあるが。方の一且をおとらむを元

國書刊行會

氣をつくること紙面也　大きなる丸をくり
縮めるも也　なる二三年間ふとのらせたる
が終の弱う抗する也と　石榴柄の折
實を拔かること　つきを又曰く宮と紙
かやるを純粹の心なるて容のるるも紙も
實を太らせるを木弱るるものるるる又宣
の紙るる太るるる用段るるこうず等
實のある紙なる也　太りなる時分ハりかを子
を以つて宣のつきある　下部を緊縛す
えるる實をもるる柄も又為

又元氣を失ひるるさる也と　今盆栽
又樣を為實說るるるを榛柏と石榴也
此の榛柏の名實此を爲所謂後の人石榴
山也此山奥深く到る人口入るを
怪る壽默師を紹宗繼者を無んを
れる身を拔て　也生涯と稱して投宗彩の
こるるして深く　大木の根を伸ひる榛柏と
仏元僕の去る業き所以也　ここ（以沈四寸
七年七月廿七日　石榴柄折斜分し折て現
ち）

國書刊行會

○今回の病者中高宮の大臣事一の御ようすを
聖上陛下の御容態を[illegible]
[illegible]
重態の電報[illegible]
[illegible]
[illegible]

と相談しまるべき事柄を不審の
ところをあらためるべし最ところ
同今を相用を学ひまた用務を異す
るものとなれど北の大海の知るを見て外
の事ものとなる毎日行者をと
うひ一定の約束を決しけり（明治四十五年
七月廿九日於本国志うす）

國書刊行會

國書刊行會

以下全て
白紙

國書刊行會